

小1プロブレム対策を考える5

— 保護者サポーターから見たS市すこやかプラン5 —

高木 友子^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

本稿はS市A小学校における小1プロブレム対策すこやかプランについて保護者サポーターの視点から報告する第5報である。今年度も傘や雑巾や鉛筆を自分の力で正しく使えないという1年生の不器用さが目立った。しかし、保護者サポーターと6年生の支援で小1プロブレムは防ぐことができたと言えるだろう。小1プロブレムの根本的な解決には教育形態の連携や社会や家庭の養育力の回復が必要だが、それは容易な方法ではなく、人的配置を厚くすることはプロブレム防止のための有効な手段である。

【キーワード】

小1プロブレム 保護者サポーター 不器用さ 人的配置

1. 問題

「小1プロブレム」とは、東京都教育委員会(2008)によれば、小学校新入学児が「学習に集中できない、教員の話が聞けず、授業が成立しない等」の状態である。

1990年代より小学校での学級崩壊が注目される中で当時の文部省より研究の委託をされた学級経営研究会(2000)が「小1問題」に触れた。それまでの学級崩壊では原因として教師の指導力の不足や思春期に差し掛かる高学年の児童の反抗などが指摘された。(それらは単独ではなく複合的な要因として機能する。)しかし、「小1問題」の特徴はその名の示す通り、小学1年生という反抗する

思春期にはまだ遠い児童の間で、教師の力量とは関係なく生じることにあった。

では、「小1プロブレム」の原因とは言えば、就学前教育と小学校教育の形態の差とそれに対する児童の適応力の不足によるものと考えられている。就学前教育と小学校教育の形態の違いは小1プロブレムが始まったときに生じたわけではなく、それ以前から就学前教育と小学校教育とはその形式に違いがあった。1989年の幼稚園教育要領改訂、1990年の保育指針改定による子ども主体の保育の強調の影響を指摘する声もあるが、それ以前にも子ども主体の保育を実践している園は存在し、それが小1プロブレムの学級崩壊を生じせしめている様子は見られず、他方、1998年に保育者の在り方と計画の意義が強調された要領の再改訂が行われても小1プロブレムの発生が減じたという知見は得られていない。むしろ近年は小1

<連絡先>

高木 友子 takaki@shohoku.ac.jp

プロブレムの予防策として就学前教育と小学校教育の形態の歩み寄りが以前より見られると言ってよいだろう。小1プロブレムの発生は決して就学前教育と小学校教育の形態の差が開いたことによるものではなく、それまで対応できていた差に子どもたちが適応できなくなった、つまり、子どもの適応力が低下した結果と考えられる。家庭や社会の育児能力の低下、少子化による社会的発達の機会の減少により、子どもの「人間関係が希薄になって」おり、同時に子どもの「自分をコントロールする力がついていない」と保育や教育の現場から報告されている（東京学芸大学「小1プロブレム研究推進プロジェクト」、2010）。同プロジェクトによる2008年の調査では実に全国から調査に協力した地域の4割以上で小1プロブレムが報告された。小1プロブレムに直面し困難を感じている地域ほど調査に協力する傾向があるとも考えられるが、当時すでに小1プロブレムは特別な現象ではなくなっていたようだ。同年改訂、告示の幼稚園教育要領、保育所保育指針では小学校との連携が明示されており、東京学芸大学同プロジェクトの報告では、やはり同時期に全国の多数の幼少連携プログラムが紹介されている。一方、同調査の中で小1プロブレムの発生理由について尋ねたところ各自治体教育委員会の回答は「家庭におけるしつけが十分ではない」「児童に自分をコントロールする力が十分に身につけていない」という二つが最も多く、やはり、就学前教育・保育もしくは小学校教育の形態が変化した故の発生ではなく、子どもたちの適応力の低下が原因とみられていることがわかる。

同報告では、小1プロブレムはコミュニティの問題でもあるとしている。本来、子どもは家庭のみで養育されるのではなく、子育て家庭の属するコミュニティ、社会によっても子どもは育てられる。同報告によれば、様々な大人から見られて育

つ子どもが多い地域社会では子どもが落ち着き、小1プロブレムが発生しないという。

小1プロブレム対策のためだけではなく、社会と保育の場において、子育て家庭の支援が年々重要性を増し、質的にも量的にも大きなものになっていることは言うまでもない。そして、福祉施設である保育所を含む保育の場に比すれば小学校では顕著ではないかもしれないが、同様の傾向にある。しかし、そのような傾向と保育者、教育者の努力をもってしても、小1プロブレムを始めとする家庭に端を発する諸問題を解決するには、家庭の育児能力の低下の勢いは決して弱いものではなく、また、子どもやその家庭を支えるに足る地域社会の再生を保育現場や学校の努力だけで促すのは非常に困難と思われる。

保育の場での就学前指導や、就学児家庭への就学準備教育の促しは複数の自治体で行われている。また、教育委員会や地方行政などから就学家庭へ生活指導冊子が配布されるなどの対策もとられているが、効果の検証はまだ十分ではない（東京学芸大学「小1プロブレム研究推進プロジェクト」）。

そこで適応力の十分な回復が見込めないのであれば、適応せねばならない、就学前と小学校との差を可能な限り小さくしようというのが現在の幼保小連携の大部を占めている動機づけと言えるだろう。

保育の現場からの段差解消はいかに行われるか。月森（2013）によれば8割の幼稚園で小学校との何らかの連携がとられているという。保育者が正しく理解せねばならないのは、教科教育の先取りは必ずしも段差の解消にはつながらないということである。

前出の東京学芸大学のプロジェクトの報告によれば、小学校の教諭が小1プロブレムにあたると考えている状況として多く挙げられるのは「授業

中に立ち歩く児童がいる」「学級全体での活動で各自が勝手に行動する」といった学級活動の不全であり、「授業についてこれない」という状況の選択はそれらの十分の一程度であり、中心的な問題ではない。故に就学前教育として必要なのは、教科教育の先取りでは決してなく、自己統制と集団活動が可能となるよう子どもたちの生活を計画し、実践することである。

ベネッセ教育総合研究所（2016）の調査によれば、保育園児にしても幼稚園児にしても園外で友だちと遊ぶ機会が減少しており、園外での主な遊び相手は母親になっている。このような状況では子どもたちの集団経験は保育の場に一任されることとなる。

小1プロブレムを構成する子どもたちは教員に反抗しているわけでも、級友を拒否しているわけでもない。子どもたちは全般的に注目や関わりを求めている。教師や補助員の指示を聞き入れることができなかつたり、友人関係を形成できず衝突しているように見えたりしている子どもであっても、それは表面的な言動や現象であり、対人的な関係を求めている。しかし、関係の在り方が、小学校の教室内で提供されるものと、子どもたちが求めるものとで異なるとき、小1プロブレムが生じると考えられる。菅野（2015）は、集団生活の基盤は三人関係であるが、就学前までに二者関係を卒業し、三人関係に移行できていない子どもが増えていると述べている。二者関係を卒業するためには十分にそれを経験することが必要である。しかし、それが十分でないために、小学校の学級集団の中でも子どもが二者関係を求め、そのために集団活動が成立しなくなる。筆者のこれまでの調査の中でも人との関わりを求めているのに、うまく関われず、集団活動を乱す原因となる子どもが散見された。従来は、家庭、社会、保育の場において多様な二者関係を経験し、総合的に満足を得

られていたものが、家庭と社会の養育力の低下によって、乳幼児期に二者関係における満足を十分に得ることができず、就学期に至ることも、小1プロブレムの原因と考えられる。

幼保小連携の一環として、幼稚園・保育所・認定こども園の園児と小学校児童の交流が行われる場合も少なくない。しかし、前稿（高木、2016）でも述べたように隣接しているなど立地条件に恵まれた一部の園以外は日常的な交流は難しく、1、2回イベント的に交流するのみでは園児の入学に対する不安を多少低減するぐらいの効果はあるかもしれないが、園児と児童の関係や園児の小学校生活の理解を深めることも難しいだろう。

就学前の対策では小1プロブレムが十分に防止できないのであれば、受け入れる小学校側の対策にはどのようなものがあるだろうか。子どもたちの主体的な活動を増やしたり、教科や時間割りの境を柔軟にしたりということでは保育の形態に近づこうという努力が見られる。子どもたちが慣れ親しんだ保育の形態との段差を小さくし、滑らかに移行することで子どもたちの戸惑いを解消し、プロブレムの発生も予防しようというものである（お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校、2006；月森・和田、2013）。

また、1年生の大集団での活動が難しいと見られていることから、2011年度より1年生が35人以下学級に、2012年度より2年生も35人以下学級に設定されている。児童が二者関係を要求することが小1プロブレムの一要因であろうことから考えても学級での人的配置を厚くすることに効果が期待されている。一学級に複数の教員を配置したり、補助員などを置いたりする対応が複数の小学校で行われている（東京学芸大学「小1プロブレム研究推進プロジェクト」）。東京都教育委員会（2013）によれば、教員を加配することにより、集団が小規模となり、児童が落ち着き、プロブレムが生じ

にくくなるという。

S市A小学校では小1プロブレム対策として「すこやかプラン」を2011年度より実施している。著者は2012年度より保護者サポーターとしてプランの実施に参加し、内容とその成果について報告している。本稿は一連の報告の第5報にあたり、すこやかプラン実施6年目となる2016年度について報告する。

2. S市すこやかプランについて

(1) A小学校

S市は首都圏にある人口70万ほどの政令指定都市である。A小学校は都内ターミナル駅より私鉄急行で40分ほどの駅から徒歩15分程度のところに位置する。駅周辺は大きなマンションや商業ビルが立ち並ぶ商住地区であり、そこから続く住宅地域にA小学校はある。

交通の便もよいことからこの地区は住宅開発が進んでおり、人口全体、児童数とも増加が続いている。2016年度A小学校の児童数は約800名、26学級であり、1年生は約140名、5学級編成となった。

(2) 「すこやかプラン」内容

「すこやかプラン」とは「幼稚園や保育園で小さな集団に慣れてきた新入児に対して、小学校での集団生活や学習形態などに自然にとけ込めるように支援するプラン」とA小学校では定義されている。2011年度より実施され、2016年度で6年目の実施となるが、実施内容は試行錯誤と変遷があった。導入当初は担任教諭のローテーションと学期中の学級の再編成があったが、これは2015年度より行われなくなった。

2016年度まで継続した主な実施内容は以下の2つである。

① プラン開始2日めから4月中毎朝の学年集会の実施（学年担任のチームティーチングによる学年全体の指導）

② 4月中保護者サポーターと6年生による新入生支援

以上の2つの内容は入学式の翌日から実施される。

学年集会は全校集会など特別な行事があるとき以外はほぼ毎日1時間目に行われる。1階の教室から3階の多目的室までの移動（私語の抑制含む）、集会時に学年全体へのボランティアの読み聞かせ、教員の訓話、歌唱指導にやはり私語なく集中して耳を傾け、行い、また私語なく整列して教室へと戻ることを目標とする。

1年生の朝の支度、集会、授業、給食、清掃にはボランティアである保護者サポーターと、学年集会と授業時間以外は6年生児童とが教室に入り、新入児童を直接支援する。

2016年度はこれまでよりやや多めの22名の保護者サポーターの参加があった。その内、前年度までの経験者は筆者を含む5名であった。

サポーターの職務は登校時、昇降口での挨拶から始まり、靴の履き替え、雨天時の雨具の扱い、教室での持ち物の整理、トイレの付き添い、着席や授業への集中の促し、教室移動のつきそい、給食の配膳、下校準備など特に新学期はじめは学校生活のすべてに関わると言える。

保護者サポーターのシフトはかなり流動的であり、各人可能な時間無理のない範囲で参加することになっており、予めシフトを固定してはいない。サポーター控室には一応、シフト表が張られており、前もって参加可能であるとわかるサポーターは記名するが、あまり確かな使い方はされていない。故に1年生5学級に対して22名のサポーターの登録があり、多いときは1クラスに2人サポーターがいることもあるが、1クラスに1名を欠く

こともある。クラス入りの仕方に関しては教師からの指示はなく、サポーター自身が各クラスの様子を見て援助の必要性の高い児童が多いクラスから入っていく。

また、控室には記録ノートが用意されており、支援後、気になった点をサポーターが記入し、担任とサポーター同士と情報を共有する。

小学校から貸与された揃いのエプロンを着用することがサポーターの目印となる。

3. 2016 年度実施経過

これまでと同様にプラン実施中のすべての時間に参加・観察ができたわけではなく、プランが実施された17日間の内、参加・観察できたのは13日間、登校時間から集会までの時間を中心としたが、1日の参加・観察時間の長短はあり、また体調不良で集団活動に参加できない児童のつきそいなどもあったため、必ずしも毎日同じ場面に参加できたわけではない。

今年度もすこやかプランは入学式の翌日から始まったが、筆者は実施初日の参加はかなわず、実施2日目からの参加・観察となった。この日は年度初めての雨天と道具箱の持参が重なった。手に大きな荷物を持っているため、傘を閉じられなかったり、また、傘を巻き留められなかったりする児童がそれぞれ10～20人程度見られた。保護者サポーターと通学班の上級生が援助した。一週間後に再び雨天となった。この日は大きな荷物はなかったこともあり、2日目のような混乱は見られなかった。しかし、荷物がなくとも、傘を巻き留められなかったり、折りたたみ傘を巻けなかったりする児童が数名見られた。1年生の一部で、生活習慣の確立と手先の細やかな動きが十分でないこと、また、その状態を家庭で把握できず、自力では扱いきれない用具を使わせていると考えられる。

2013年度まで1年生2クラスの靴箱が奥と手前という配置のため顕著であった登校時の昇降口の混雑は、2014年度から奥に上級生の靴箱を、手前に1年生の靴箱を配置したことにより解消され、今年度も普段は大きな混乱はなく、サポーターが児童の移動の停滞を解消するために流れを作るといった援助は不要となった。今年度も荒天や大荷物などの負荷的条件がなければ、児童の移動は円滑であった。しかし、入学後初の週末明けはいわゆる「月曜セット（上履き、体育館履き、体育着、給食着）」の持参があり、荷物を持って立ったまま、上履きを出し、靴を履き替えることが難しいようで、昇降口に座り込んでしまい、動線を遮ってしまう児童が十数人観察された。勘違いをしたのか、昇降口でランドセルを下してしまい、持っていられないので床に置き、動線を遮る児童も何人か見られた。今年度はこれ以降、月曜日の観察がかなわなかったため、これらの混乱がいつ収束したかは不明である。

教室内は、入学3日目では、ランドセルの中から荷物を片付けられない児童がクラスに数人見られた。荷物を入れたまま、ランドセルをロッカーにしまってしまう。ランドセルから荷物を出し、机の中に入ってしまうというルーティンがあることを自ら思い出して行動することができず、サポーターからルーティンを思い出すように言葉かけがあると片づけられる。この状態の児童は翌週前半までクラスに数人観察された。2週目後半になると、荷物を入れたままランドセルをロッカーにいらしてしまう行為は見られなくなったが、それに代わって、荷物を片付けず、ランドセルを机の上に置いたまま、級友とのおしゃべりやふざけ合いに興じてしまう児童がクラスに数名見られるようになった。その他、プラン終了時期になっても机の上で荷物を片付けられず、ロッカー前の床にランドセルを投げ出し、荷物も床に出し、机に運んでいく

(当然、級友の動線を遮る)という片づけ方を
児童がクラスによっては複数名観察された。

また、朝の準備のとき、児童は連絡帳に家庭からの連絡があるかどうかを確認し、連絡が記入されていた場合は担任に提出する。入学3日目ではまだこのことを教師が直接指示していたが(ルーティンとして確立すると教師は一々指示しなくなる)、指示されても、連絡帳の「おうちからの連絡が書いてあるかどうか」を判断することが難しい児童がクラスに数人見られた。そして、同日、持ち物の机へのしまい方について、何を机のどちら側にしまうかなども細かく学校から決められているのだが、それを担任が板書と口頭で説明しても指示通りに片付けができないという児童も数人見られた。いずれもサポーターが個々の児童に状態とその対応を伝えることで担任の期待する行動をとることができた。

例年、自力でなかなかできない児童が目立つ名札付けは、今年度は6年生児童の支援が行き届いたのか、学校から家庭への予めの働きかけがあったのか、サポーターの支援を必要とする児童はほとんど見られなかった。

給食開始後からではあるが、これもまた例年、プラン実施期間の最後まで支援が必要とされた前日の牛乳パックを開いて畳む作業も今年度はサポーターの支援機会がほとんどなかった。今年度は新入生支援に入った6年生が例年になく積極的であったため、1年生が困難を感じていることが見えやすい名札付けや牛乳パック開きが6年生の援助で速やかに終了したのかもしれない。

トイレに関する援助をサポーターが求められることも少なく、新入生たちは早くから自立的にトイレを使用した。例年、若干名見られる頻尿傾向の児童も今年度は目立たなかった。

学年集会は2日目からの観察となった。今年度はそれまでより片付けや教室移動などに関する教

員からの指導がやや緩やかであり、集会2日目には移動に大きな混乱はないものの、教室移動の際に若干の私語があった。サポーターは「しーっよね。」と注意をする。私語は期間後半まで続いたが、プラン終了直前に、静かに移動することができるようになった。

学年集会中、児童は概ね、いわゆる体育座り、三角座りで参加するが、姿勢が保てず、足元が乱れる児童が若干名おり、周囲の級友をつついたり、話しかけたりする児童もやはり若干名観察された。これらには教員もサポーターも注意を試みるが、学年集会はほぼ普通教室と同等の面積に5クラスの1年生児童を集めるため、一度全員が集まると教室内の移動は難しく、その場では注意ができないこともあった。

集会では絵本の読み聞かせが行われる。1週目はそれほど顕著ではなかったが、2週目に入ると緊張が緩和されたのか、読み聞かせの内容に関する(必ずしも認められてはいない)発話が例年になく多くの児童からあった。3週目からの様子は観察できなかったため、確認できなかった。

そして、去年も観察されたが、集会場所から各教室に戻る際、他のクラスの友達に「バイバーイ」と別れの挨拶をする児童が多数出て騒然となった。騒がしくなるので教員からの注意があったが、この行動は暫く続き、2週目の終わりに漸く目立たない程度に落ち着いた。

授業や教室内の活動に際しては、教師のクラス全体への話かけに注意を向けられない児童がクラスに2,3名見られた。サポーターが個別に働きかけると理解や行動は可能であった。割合が高いのが鉛筆の誤った持ち方であり、クラスによっては1/4近くの児童に誤りが見られた。注意して持ち方を確認すると、その場は直るが、すぐにまたおそらくは癖になっているだろう誤った持ち方に戻ってしまう。

また、着席の姿勢の乱れが気になる児童が各クラス4.5名は見られた。

プラン後半になると、学校生活に関して子どもたちの中にルーティンが成立し、日常の多くの行為が円滑で速やかになるが、毎日のルーティンではない行動(体育着や体育館履きへの着替えなど)は教師の指示や板書があっても気づけなかったり、ルーティン化したことに対しそこから外れた指示などが意識しづらかったりする児童がクラスに10名弱程見られた。

3週目に入ったところで、登校しぶりを示す児童が出てきた。昇降口まで母親に付き添われ、別れるときに泣き出したり、教室に入りたがらなかったり、活動に参加せず、緘黙に近い状態を示したりする児童が見られた。4週目には日によっては登校しぶり状態を示す児童が学年で4名以上見られた日もあった。教室に入らなかったり、逆に教室移動についていかなかったりするので、サポーターがつきそうが多かった。プラン終了時期までには激しい登校しぶりは見られなくなり、登校しぶりを示していた児童が楽しそうに生活する様子も見られるようになった。また、激しい登校しぶりではないものの、教員やサポーターに体の不調を訴え、保健室に何度も通う児童も数名見られた。保健室で様子を見ることもあれば、養護教諭の説得で教室に戻ることもあった。

その他にもけがをしたとサポーターの注意をひく、級友がトイレが済んだタイミングでトイレに行きたがる、など、サポーターの関心を買おうとしたり、級友と同行せず、自分のペースで行動することを望んだりする児童も観察された。しかし、それが広まったり、騒ぎの元になったりすることはなかった。

給食と清掃に関しては月半ば、給食開始4日目に観察することができた。給食に関しては6年生の積極的な援助で4日目には混乱はほとんど見ら

れなかった。

清掃に関しても混乱はしていなかったが、前日までに担任からの説明があったにも関わらず、多数の児童が雑巾を正しく絞ることができていなかった。

下校準備もこの日に観察できた。すでに4月半ば過ぎとなっていたので、下校準備は円滑であった。しかし、本来は私語なく、着席して下校を待つルールだが、それを守れていない児童がクラスに数人は観察された。

校庭での授業の様子はやはり月半ばに1日だけ観察できた。1、2名はしゃいで私語をする児童がいたが、大きな混乱などは見られなかった。

集会時や授業時に周囲の友達に話しかけたり、つついたりという行動は見られたが、子ども同士の激しいトラブルは今年度、目立たなかった。

その他、例年、空き時間は自由帳でのお絵かきか塗り絵をすることになっていたが、今年度はクラスによっては教員が折り紙を許可したところ、大量の作品を作って、机をいっぱいにし、必要なものが机に取まらなくなる児童が複数出るということがあった。

プラン終了後、1学期、2学期と朝のお話会(読み聞かせ)を観察することができたが、大きな混乱はなく、子どもたちは読み聞かせに集中し、楽しむことができていた様子であった。

4. 考察

今年度の特徴として、小さなつつきあいはあるけれども、子ども同士の大きな衝突やトラブルが見られなかった。

一方で明確な登校しぶりが観察された限りで4名以上というのは例年より多かった。また、登校しぶりの発生時期が昨年度のように入学式直後ではなく、4月半ばになってからであった。時期に

関しては入学意欲が低減し、小学校生活がイベントでなく日常となったところで不適応が顕在化するというのは珍しくはない。幸い、期間中に観察された登校しぶりは落ち着き、児童の学校生活への適応が観察された。また、体の不調を訴え、保健室に頻回通う児童が数は少ないものの観察された。これらの児童は不調を訴え、担任、サポーター、養護教諭の注意をひくことで二者関係に持ち込むことを欲しているように見えた。しかし、当該の児童たちの状況は長引くことなく、教室へ戻ることができ、このような行動が周囲の級友に広がり、混乱するというようなことはなかった。

逆に例年よく見られた頻尿を訴え、トイレに頻繁に通う児童の姿がなかった。頻尿は学校環境への緊張と不適応が身体症状として表れている可能性が高い。今年度の児童は不適応を意識せず、身体症状化させるよりも、不適応をより意識していたとも考えられる。

やはり今年度の特徴として、例年1,2名観察された身なりや持ち物の不備などから家庭での養育状況が心配されるケースが今年度は期間中は発見されなかった。

登校しぶり、分離不安は、養育者との愛着の成立が前提となるので、今年度の児童に関しては比較的家庭での二者関係が安定しており、それが児童に影響しているとも考えらえる。

上記の可能性はあれども、1年生が自分で十分に傘を扱えない、雑巾をしぼれない、鉛筆を正しく持てないと生活経験が不足していたり、それを家庭で把握しきれていなかったりする傾向も否めない。

今年度は6年生の手厚い支援があっただけ、または、家庭への事前の働きかけがあったのか例年長引く名札と牛乳パックの扱いに関しては支援の必要が見られなかった。しかし、前述したように傘や雑巾、鉛筆、ランドセルなどの扱いで手先を始

めとする身体の運動の不器用さが目立つ児童は一部とは言えども見られる。6年生やサポーターの支援で教室内の混乱は予防されているが、もし、教室内に手厚い人的配置がなく、担任一人で活動によっては十名近くの子どもの個別支援を要求されるようであれば、円滑な学級活動や授業の進行は困難となるだろう。もし、安全ピンの扱いなどについて家庭への事前の告知があり、家庭での教育で児童の技術が向上したのであれば、やはり、小1プロブレム予防のために家庭の養育能力を向上させることが有効と考えらえる。しかし、現時点では判断する材料は十分ではない。

例年になく気になったことは、児童の姿勢の乱れである。例年も椅子に正しい姿勢で長時間座ることができない児童が見られたが、今年度は集会時の体育座りも乱れる児童が少数だけ見られた。身体の姿勢維持の力が低下している可能性が考えられる。教室内の着席はさらに姿勢を保てない例が観察されたが、これは子どもの身体能力もさることながら前報（高木、2016）でも報告したように環境の未整備もある。机と椅子の高さが児童の体格に合っていないかったり、座布団にする防災頭巾の安定性が悪かったりして、姿勢よく座れない環境が各クラス多々見られた。担任への報告はもちろん行ったが、小学校教員に環境設定を検討してほしい。

前年度程ではないが引き続き私語の傾向が見られた。教員からの指導もまた前年度に引き続き緩やかであったため、この私語の傾向が新入児童の有する傾向なのか、教員の指導に因るものであるのかは見極められない。さらに年度を重ね、観察すべきであろう。

その他は例年と傾向を同じくするが、卒園前に各園で生活習慣を確立させているであろう新入学児は入学による環境と生活とそこでのルールの変化にすぐには適応できない。つまり確立したルー

ティンを繰り返すことは彼らにとって難しくはないが、ルーティンを超えた生活能力の応用と適応は1年生にとっては容易なことではないと言えよう。しかし、これまでの報告からもわかるように数日から1週間程度で1年生は新しいルーティンを獲得する。だが、複雑な学校生活の中でルーティン外の行動を要求されることもあり、そこでまた困難が生じる。

また、クラス全体への話しかけに注意を払えるか、ルーティンを理解した上で自分の行動をコントロールできるか、という点でやはり困難のある児童は、多くはないものの、各クラス複数存在する。彼らを放置すれば学級活動の成立もまた難しくなる。小1プロブレムが生じる前に手厚い支援つまり人的配置で適応性、準備性を高めることがプロブレムの予防策として即効性があると思われる。

小1プロブレムの原因は就学前と入学後の教育形態の差と入学児童の適応力の低下、ひいては社会と家庭の養育力の低下と考えられている。幼保小連携によって形態の差をなくすこと、社会と家庭の養育力の向上を図ることはプロブレムの根本的な解決につながるだろうが、その実現は非常に困難であり、実現の可能性があったとしても部分的であり、長大な時間を有する。

プロブレムの現場である小学校としてはその長大な努力の成果を待つだけでは毎年入学してくる児童の教育を十分に行えない。その点で、人的配置は根本的な解決策ではないかもしれないが、即効性のある対策と言えるだろう。

今年度もすこやかプランを通して、小1プロブレムはある程度防止できたと言えるだろう。しかし、これまでの報告でも述べた通り、小1プロブレム予防の真の目的は1年生の適応だけではなく、1年生の適応から始まり、小学校在籍の6年間、ひいては進学後まで、学校生活に子どもたちが適

応することにある。

A小学校は2016年度をもって全学年がすこやかプランを経験したことになった。すこやかプランの成果もあり、いずれの学年も1年次は比較的安定して生活できているが、2年生以上で学級崩壊を経験した学年もある。今年度は崩壊の報告はないが、第1回すこやかプランが実施された6年生で崩壊はないものの、持ち物や提出物の管理など不十分な様子が報告されている。

小1プロブレムの原因が子どもの適応力の低下であるならば、その問題は1年次のみでは解決しない。2年次以降も子どもたちに必要な援助を行っていくことが欠かせないだろう。その点で少人数指導の導入の方向性は正しいと考えられる。

A小学校は次年度もすこやかプランを継続の予定である。可能であれば、次年度の実施についても引き続き報告したい。

謝辞

これまでに引き続き、教育サポーターの活動に参加の機会を与えてくださったA小学校の先生方、ならびに児童の皆さん、また、ともに活動した教育サポーターの皆さんに心より感謝申し上げます。

引用文献

- お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校（2006）「子どもの学びをつなぐー幼稚園・小学校の教師で作った接続期カリキュラム」東洋館出版社
- 菅野純（2015）「生涯発達心の基礎づくり」牧野カツコ（編）「子どもの育ちと保育ー環境・発達・関わりを考える」金子書房
- 学級経営研究会（2000）「学級経営をめぐる問題の現状とその対応：関係者間の信頼と連携による学級づくり：『学級経営の充実に関する調査研究』最終報告書」
- 新保真紀子（2001）「『小1プロブレム』に挑戦する」

明治図書

- 高木友子 (2013) 「小 1 プロブレム対策を考える－
保護者サポーターから見た S 市すこやかプラン
－」湘北紀要第 34 号 41-49
- 高木友子 (2014) 「小 1 プロブレム対策を考える 2
－保護者サポーターから見た S 市すこやかプラン
2－」湘北紀要第 35 号 85-92
- 高木友子 (2015) 「小 1 プロブレム対策を考える 3
－保護者サポーターから見た S 市すこやかプラン
3－」湘北紀要第 36 号 45-52
- 高木友子 (2016) 「小 1 プロブレム対策を考える 4
－保護者サポーターから見た S 市すこやかプラン
4－」湘北紀要第 37 号 85-94
- 東京学芸大学「小 1 プロブレム研究推進プロジェクト」(2010)「小 1 プロブレム研究推進プロジェクト 報告書」未公刊
- 東京都教育委員会 (2008)「東京都教育ビジョン (第 2 次)」
- 東京都教育委員会 (2013)「小 1 問題・中 1 ギャップの予防・解決のための『教員加配に関わる効果検証』に関する調査 最終報告書」
- 月森久江 (2013)「『小 1 プロブレム』解決ハンドブック」講談社
- ベネッセ教育総合研究所 (2016)「第 5 回幼児の生活アンケートレポート」ベネッセ教育総合研究所
- 和田信行 (2013)「小 1 プロブレムを起さない教育技術」小学館

How to solve the First-grade Problem 5 - Thinking about the S-City Sukoyaka Plan 5 -

Yuko TAKAKI

[abstract]

This is the 5th report from a point of the Parent Supporter's view about Sukoyaka Plan to solve the First-grade Problem at A Elementary School in S City. The 1st grade students were awkward but they were helped by the Parent Supporters and the 6th Graders. With the smooth connection of educational styles and restoration of family nursing in the society we will be able to solve the problem but it would be a difficult way. The arrangement of supporters is an easier and useful way.

[key words]

The First-grade Problem, Parent Supporter, awkward